

2. 事業の概要と成果	
<p>(1) プロジェクト目標の達成度 (今期事業達成目標)</p>	<p>活動対象地における地域住民による OVC へのケアサポート体制強化と青少年のリーダーシップ育成 (最終年) 指標: こどもケアセンターとコミュニティ関係者の協力による地域内の OVC ケアサポート体制が定着している。 (達成度) 50%</p> <p>新型コロナウイルスの影響を受けたものの、OVC ケアならびに給食提供のための菜園づくりに関する研修については、ケアボランティア 8~11 名(時期により、産休に入る、家庭の事情で離職するなどの状況が生じ、人数に変動あった)が、予定していた研修を滞りなく受講することができた。</p> <p>その結果、学びを活用し、実際に OVC の課題に対応した(対応中の)事例が 200 件以上確認された。保護者との関係性も良好で、保護者から相談が持ち込まれるケースも数多く確認された。また(OVC たちがセンターに戻り始めた 8 月以降)年間を通じて 3 種類以上の野菜が栽培され、給食が提供されてきた。一方で、コミュニティ内の他のアクター(学校など)との協力体制は 2 年次以降に促進していくことが必要。</p> <p>また、活動の 4 本柱のうち、2 つの柱となる活動(以下「(2) 事業内容」の 2 および 3)について、新型コロナウイルスの影響でほとんど実施できなかった。</p> <p>【今期達成目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケアボランティアが OVC のケアに関する知識とこどもケアセンターの活動を改善するための知識を得て、それを活用し始める。 ・青少年がリーダーシップ/ライフスキル研修を受けて、知識を得て、それを活用し始める。 ・ケアボランティアと青少年が菜園づくりにより年間を通じて食べ物を得られるようになる。
<p>(2) 事業内容</p>	<p>1. <u>OVC に対するコミュニティ内のケアサポート体制の強化</u></p> <p>1-1. <u>こどもケアセンターにおけるケアの質向上/ケアボランティアの育成(研修)</u></p> <p>a) 研修:</p> <p>⇒実施時期は遅れたが(新型コロナウイルスの影響)、全て計画どおりに実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケアボランティア 8~10 名に対し実施を予定していた研修、①カウンセリング研修(3 日間)、②HIV/エイズ・性感染症(5 日間)、③救急法(5 日間)、④虐待とトラウマ(3 日間)の研修が計画されていた(研修機関名: ①FAMSA Tzaneen、②CMT、③Red Corss、④FAMSA Vhembe)のに対し、以下のとおり実施された。 ①→2021 年 4 月 28~30 日、11 名参加 ②→2022 年 2 月 7~11 日、8 名参加 ③→2021 年 10 月 11~15 日、8 名参加 ④→2021 年 6 月 9~11 日、10 名参加 <ul style="list-style-type: none"> ・いずれも研修の約 2 ヶ月前には準備を開始した。事前にケアボランティアと申請団体で複数回のミーティングをもち、そこで各研修トピックについて申請団体から概要を説明、ケアボランティアから期待することや質問をもらい、これに申請団体による日常的なモニタリングで観察される課題点などを合わせて研修機関にフィードバックし、研修のプログラム内容に反映して実施した(構成の変更やすでにあるプログラムの時間配分、重点を置いてほしいトピックや新たに加えてほしい情報など)。

b) モニタリング、記録：

⇒計画どおりに実施した。

・研修後には、ケアボランティアらが、OVC のセンター出欠表やセンターでの OVC の様子の観察、OVC の家庭訪問、保護者らからの相談を受けて、OVC の課題対応にあたっている。申請団体は定期的にこれらに参加し、モニタリングとフォローアップを行い（ケアボランティアの相談にのる、解決法の検討、対応の改善など）、研修の学びの定着と OVC を取り巻く状況改善のためのインプットを行ってきた。

・また、ケアボランティアとの間で月例会合を月 1~2 回のペースで実施、各 OVC を取り巻く現状やセンターが直面する課題などを確認し、対応中の案件（OVC の課題など）に漏れないように確認し、進めてきた。

・ケアボランティアに対し、課題対応例についての記録を促してきた（→実際に記録されている）。

1-2. 子どもを持続的に支えるための地域づくり

⇒新型コロナウイルスの影響で実施できず、2 年次に延期

計画として、学校の保護者会のようにこどもケアセンターを開放し、地域住民にこどもケアセンターの活動、通っている OVC の様子を見せることで、こどもケアセンターの役割・意義を理解してもらう機会として、オープンデーの開催を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で、ケアボランティアと OVC 以外の方がセンターに集まって何かをすることは難しく、2 年次に降に延期することとなった。

2. こどもケアセンターにおける活動強化

2-1. こどもケアセンターにおける年齢別活動の実施

⇒新型コロナウイルスの影響で実施できず 2 年次に延期

計画では、OVC の年齢に応じた（5~10 歳と 11 歳以上）こどもケアセンターの日常的な活動プログラムの①導入編（全年齢対象）、②5~10 歳対象および③11 歳以上の基礎編の研修を、いずれもキャンプ形式で①3 日間×1 回、②③5 日間×1 回実施予定だった（実施機関はいずれも KTD）。しかしながら、新型コロナウイルスの影響により、当初 7 月実施で準備調整していた①の延期が重なり、結果的に①~③のいずれも年次内の実施にいたらなかった。

①の延期が重なった理由は、本研修は、他団体との経験交流を兼ねてキャンプ形式で開催されるどころ、a) 南アフリカ政府の基準では人が集まっても、参加予定の他団体の規程で集まることが不可能となり、直前にキャンセルになった、b) 大人数で集まるための場所の確保が難しかったことによる。その後、新型コロナウイルスの影響がない形として、Mphego 子どもケアセンター単体で、センターの敷地で実施できるよう研修機関と交渉した結果、合意することができ、2022 年 2 月によろやく①が開催可能となった。しかしながら直前まで準備を進めていたところ、トレーナーが新型コロナウイルスに感染および濃厚接触者となり、2 年次に延期せざるを得なくなった（2022 年 3 月実施済み）。②、③についても 2 年次に実施予定。

3. 青少年のエンパワメント（これを通じた意識・行動変容）

3-1. 青少年の育成

⇒新型コロナウイルスの影響で実施できず 2 年次に延期

年度後半に、こどもケアセンターに通う青少年約 30~40 名を対象にリーダーシップ・ライフスキル研修（①導入・②基礎編）を実施する予定だったが、一切の活動を実施することができなかった（実施機関は KTD）。

理由は、a) ケアボランティアが2. の研修を受け、青少年の活動をサポートする環境が整ってからの研修実施を想定していたが、2. 自体が実施できなかった、b) キャンプ形式で実施のため子どもの学校休暇中の開催を想定しているが、学校閉鎖が続いたことから休暇が短縮され、また時期が例年とずれて調整が難しかった、c) 青少年らが学校のカリキュラムの遅れを取り戻すべく、学校滞在時間が長くなり、年齢が上の青少年らの時間確保が難しかった、d) 新型コロナウイルスの影響を鑑み、子どもたちをセンターとは別の場に宿泊を伴う形で集めることが難しかったことによる。

いずれも2年次に延期され、実施予定。

3-2. モニタリングと他団体との交流

⇒新型コロナウイルスの影響で実施できず2年次に延期

過去にN連で支援したこどもケアセンターと1~2日間、30~40名が交流団体の事務所へ赴き、経験交流を行う予定だったが、3-1.の活動実施を踏まえて実施される予定だったことから、実施することができなかった。2年次に実施予定。

また、10代後半から20代前半世代の青少年らを中心に、ケアボランティアと協力しながらコミュニティ内での啓発を企画・実施する予定だったが、同様に3-1.の活動実施を踏まえて実施される予定だったことから、実施することができなかった。2年次に実施予定。

研修後には、申請団体が、青少年らが自分たちで多様な活動プログラムを組み立て、定期的実施する(週2回程度)ことを支援し、また定着するようモニタリングとフォローアップに注力する計画だったが、3-1.の活動実施を踏まえて実施される予定だったことから、実施することができなかった。

4. 菜園づくり

4-1. 菜園づくり研修

ケアボランティア10名、青少年30~40名を対象にこどもケアセンターの敷地内で、当団体スタッフの指導による菜園づくり研修を実施する計画だった。

a) ケアボランティア

⇒全て計画どおりに実施した。

・本事業契約が当初想定より遅れたことから、契約前より自己資金にて研修を開始した(季節的な要素も大きいため。研修機関は申請団体)。本事業開始の3月以降、COVID-19拡大感染によるロックダウンで申請団体が活動地を訪問できなかった7月以外は、月1~4回のペースでモニタリングとフォローアップ(防虫や雨水の活用など適宜必要な技術研修を含む)を実施、常時栽培しているものをきらさないように一緒に計画を立て、アドバイスしてきた。これを受けて、2021年12月末までは、ケアボランティアらにより常に何か栽培される形で菜園が維持されてきた。

・また、ケアボランティア全員が自宅での菜園づくりを開始、申請団体は毎月1回程度これをモニタリングしてきた。ケアボランティアらは全員、年間を通じて菜園を維持している。

b) 青少年

⇒予定より遅れたが計画どおりに実施した。

・4月から研修開始の計画だったところ、COVID-19の影響でOVCらが8月半ばまでケアセンターに来られなかった。8月にOVCが戻ってきてから準備として、青少年らへの説明などを開始、9月よりセンターの敷地をつかって研修を開始した。研修では、畑のスペースの準備(草刈りなど)、畝の作り方、

	<p>マルチ（枯草で土を覆って土中の水分の蒸発を防ぐ）、ふだんの水やり、草取りなど基本的な技術を学んだ。申請団体の不在中には、ケアボランティアらが状況をフォローアップしてきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修には、10代の青少年60名が参加、これを10のグループに分けて、2グループずつ、12月まで毎月1～3回の研修を実施した（2021年9月の中間報告書提出当時は100名程度の参加を予定していたが、高校生らの参加が難しく、最終的な参加者は60名となった）。 <p><u>c) キッチン修繕</u> ⇒計画通りに実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月にキッチンの修繕工事を行った。雨漏りしている屋根を撤去新しい垂木と波板鉄板を設置した。 <p><u>d) 経験交流</u> ⇒新型コロナウイルスの影響で実施できず、2年次に延期。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケアボランティアらが、先行事例（過去のN連事業による支援団体）から持続的な維持管理の方法、持続的な実践の意義や変化を学ぶための経験交流を実施する予定だったが、新型コロナウイルスの影響で団体を超えての集まりが難しく、実施しなかった。2年次に実施予定。
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>【今期事業達成目標】 ケアボランティアがOVCのケアに関する知識を得て、それを活用し始める。</p> <p>(成果1) ケアボランティア10名によるOVCへの対応事例が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指標1：ケアに関する研修後に、研修で得た知識を活用したOVCへのケア対応事例が30件確認される（ケアボランティア1人×2～4件の対応×10名より算出） <p>⇒達成された。</p> <p>事業開始前に約130名いたOVCのうち20名程度が引っ越しや学校の卒業あるいは家庭の事情で通わなくなったが、2021年度を通じて120名の新規登録があり、1年次末時点で228名のOVCが登録されている。うち22名のOVCが2022年になってから通わなくなっている。活発に通うOVCが約200名。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記録によると、14名のOVCをのぞく全員の家庭訪問を1～複数回実施し、何らかの形で課題への対応がなされていることが確認された（課題内容は後述）。1年次末時点で家庭訪問がなされていない14名についても、センターでのケアを通じて11名の課題が解決されている、改善された、対応中であることが確認された。残りの3名については、ネグレクト（母親しかいないもののギャンブルに明け暮れて世話をしない）、誰も働いておらず学校の制服が買えない状況であることが確認されており、今後の対応必要案件として記録されている。 ・課題対応の内容については、例えば、親が子ども手当を使い込む、留守にして世話をしないなどネグレクト虐待の課題があり、保護者と継続的に話をするなどの例が多い。そのことにより保護者の態度が変わったケースもあるが、多くは根本的な状況が解決されるわけではない。そのなかで、学校の制服が支給されない場合には教会等で寄付を募って届ける、ソーシャルワーカーにフォローが必要なケースとしてリファーするなどの対応をしている。 ・ネグレクトの課題が多いことに気づき始めた理由は、研修後（OVCらがセンターに戻った8月以降）にケアボランティアらがOVCの接し方を変え、学校

の宿題等を見るようになるなかで、小学校中学年でも文字をかけない OVC が多いことから理由を確認するために家庭訪問を繰り返すうちに、保護者が OVC の世話をしない、性的虐待を受けているなど、家庭内の問題が見えてきたケースが少なくない。このように、ケアボランティアらは学んだ知識を活用して日々の活動にあたっている。なお、ネグレクトの問題は即座に解決できないが、少なくとも教育を続けられるように学校の勉強をサポートする（＋菜園づくりを通じて食事（給食）を提供する）といったレベルでの対応事例も多い。

・性的虐待については、1 件、母親が OVC をサポートしているケースがあり、申請団体とケアボランティアは「虐待とトラウマ」研修のトレーナーに相談しながら現在対応にあたっている。

・他の対応事例は、保護者の側から、OVC が学校に行かない、言うこときかず暴力的だという相談ケースが持ち込まれる事例が複数あり、これらについては OVC と話すことでほぼ全てのケースが解決している。

・解決できていないものとして、保護者あるいは OVC の HIV 感染による体調悪化などがあるが、これについては 1 年次終了間際の 2022 年 2 月に研修を実施したため、2 年次を通じてフォローアップしていく。

・上記のとおり、ケアボランティアらは当初想定していた以上に、OVC の課題に対応している。ただし、以下の研修後のポストテストの結果からもわかるとおり課題は残っている。

<カウンセリング研修>

- プレ・ポストテストを実施した。11 名中 2 名をのぞいてポストテストの結果が改善、8 名が 10 問中 7~10 問正解しており、理解が高いことがうかがえた。2 名については 6 問の正解だったが、その後、月例会合を通じてフォローアップを行っている。

- テストでは、コミュニケーションが子どもに与える影響、子どもの態度変容のパターンなどについて問題が出されたが、このうち、言葉を読まない年齢、あるいは話せない事情を抱える子どもたちによる「非言語コミュニケーション（態度変容）」の読み取り方についての正解者が 5 名と低く、また OVC の課題解決にあたって文化や慣習が与える影響についても 4 名と低かった。これらの設問は実際の課題発見や対応において重要なポイントであり、その後、申請団体として家庭訪問への同行やセンターでのモニタリングを通じてフォローアップしてきた。

<虐待とトラウマ>

- 研修機関によるテストがなかったため、申請団体が 1 年次終了後の 2022 年 3 月に 8 の質問によるポストテストを実施した。現在も活動するケアボランティア 8 名中 6 点以上正解だったのは 5 名、5 点が 2 名、4 点が 1 名で、全員が 50%以上正解だった。

- 虐待のパターン、性的虐待を受けたケースの見分け方、言葉などによる虐待を受けた際の影響など、日常的な活動で必須の知識について質問したところ、1 問を除くすべての質問の正解者が 6 名以上だった。1 問については「虐待を発見した際のステップ」についてで、より実践的な内容だったが、これについて適切な回答をしたケアボランティアは 3 名で、日々迷いながら対応している状況がうかがえた。

以上の 2 つの研修については、上述のとおり日々の活動のなかで活かされているが、今後も適宜フォローアップを継続していく。

<HIV/エイズ研修>

- 研修機関によるテストがなかったため、研修 1 ヶ月後の 2022 年 3 月に申請

団体が10の質問を設けてポストテストを実施した。

- 8名中5点以上正解だったのが4名のみで、残りは3点が3名、4点が1名と、HIV/エイズについての研修内容が難しかったことが確認された。

- 質問内容は、HIVの感染経路、ARVの効用と服薬方法、性感染症の名前と内容、日和見感染症の症状事例など、基礎的な知識について確認した。特に正解者が少なかった(1名のみ)のが、クリニックで受けられるHIV検査の内容で、これは相談を受けたり、HIVを疑う事例に直面した際に必要な知識であり今後のフォローアップが必要とされる。特に、現地の言葉に訳されない英語の専門用語が多かった点が難しいとのコメントがあり、今後活動のなかでフォローアップしていく。

研修中には、HIVの感染経路すら知らないケアボランティアが多いことが確認され、それゆえに「自分のなかにも差別があった」といった声が聞かれた。今後はそうした態度をあらためてケアに活かしていきたいという意気込みがケアボランティアから語られており、すでにこれまでに持ち込まれているHIV/エイズに関連した相談事例に対応し始めることで、知識の活用と定着を図っていく。

【今期事業達成目標】ケアボランティアがこどもケアセンターの活動を改善するための知識を得て、それを活用し始める。

(成果2) ケアボランティアが自らこどもケアセンターにおける活動プログラムを企画・実施している。

・指標1: 1回目の研修後から、ケアボランティア10名が協力して、年齢ごと(10歳まで、11歳以上)に2~3の活動プログラムを企画・実施している(週1回程度。初年度なので不定期でもいいこととする)。

・指標2: 1回目の研修後に、こどもケアセンターに通っているOVCの数が減らずに安定している(目安として申請時点で約130名のOVCが通っておりこれが減らないこと)

⇒活動が実施できず、未達成。

【今期事業達成目標】青少年がリーダーシップ研修を受けて、知識を得て、それを活用し始める。

(成果3): 青少年らがこどもケアセンターにおける活動プログラムを企画・実施している。

・指標1: 30~40名の青少年らが、5~6グループに分かれ、各グループが1活動プログラムを企画し、こどもケアセンターの活動で実施している(不定期。とにかく各グループが1プログラムずつ企画・実施できたらいい)。

⇒活動が実施できず未達成。

【今期事業達成目標】ケアボランティアと青少年が菜園づくりにより年間を通じて何等かの食べものを得られるようになる。

(成果4-1): こどもケアセンターの菜園において、年間を通じて何等かの野菜が栽培され、給食に提供されている。

・指標1: ケアボランティア10名がこどもケアセンターの敷地で常時3~5種類の野菜を、年間を通じて栽培している。

・指標2: 研修後は、年間を通じて、こどもケアセンターの週5日の稼働日のうち最低3日は給食が提供され、野菜食材が全てこどもケアセンターの菜園の収穫物から提供される。

・指標3: ケアボランティアが給食の提供内容を記録している。

⇒ほぼ達成された。一部のみ未達成。

・ケアボランティア 8～11 名が、2021 年 12 月末までは、ごく一部の期間をのぞき、年間を通じて 3 種類以上の野菜を栽培してきた。時期によっては 2 種類程度のこともあったが、こうした時期も収穫して冷凍しておいた野菜が活用されていた。

・8 月に OVC が戻ってきた時点で、2～3 種類の野菜が収穫できる状態になっており、地域住民や学校給食の余剰からの寄付を組み合わせながら、週 5 日、給食を提供している。野菜食材はほぼ全てが子どもケアセンターの菜園の収穫物だったが、次期によっては、寄付のトマトや豆の缶詰を使うこともあった。

・毎日ではないが、写真で給食の提供内容が記録されてきた。

＜一部未達成の内容と理由＞

・2022 年 1 月からは、南ア全土で洪水が多発するほどの豪雨が続き、活動地も例外ではなかった。このため、播種や苗を植えては菜園がダメージを受けるということが繰り返され、2 月以降 3 月まで、菜園づくりができない状況が続いた。こうした状況下で、2 月下旬までは、2021 年 12 月までの収穫物と寄付で給食を賄ってきたが、2 月末（から 2 年次の 2022 年 3 月まで）に一時給食が途絶える事態が発生した。

・今後はこうした異常気象など、予測不可能なリスクへの対応・対策も考えながら栽培計画を立てる必要性をケアボランティアも認識するようになった（2 年次に実践しながらその方法を検討中）。

（成果 4－2）：青少年が自宅でも菜園から食べものを得られる。

・指標 1：研修に参加する青少年約 30～40 名のうち 7 割の青少年（20～30 名）が自宅で菜園づくりを開始している。

⇒自宅ではなく、センターの菜園においてほぼ達成された。一部未達成。

・8 月に OVC がセンターに通えるようになり、9 月下旬から研修を開始した。研修に参加した 60 名のうち活発に菜園の維持管理に関わってきたのは 40 名強と約 6 割だった。12 月にはトマトやチャイニーズマスタードが収穫され、翌 1 年からの給食に活用された。

・研修を開始したのが 8 月で、年内はセンターの敷地における技術研修と維持管理方法を学び、それを継続することに注力したため、自宅での菜園づくりを促進しなかった。

＜一部未達成の理由＞

・成果 4－1 に記載のとおり、2022 年 1 月以降、1 年次末の 2 月末まで、雨天により菜園づくりが難しい状況が発生した。

（成果 4－3）：収穫物の保存・管理環境が整う。

・指標 1：子どもケアセンターのキッチンが修繕される。

⇒8 月にキッチンの屋根が修繕され、その後は上述のとおり、野菜が少ない時期に保存した野菜が活用されるなど、収穫物の保存・管理環境が整った。

未実施の活動もあり、一部未達成の成果もあるが、上述の成果は、SDGs

	<p>のうち特に、</p> <p>目標 1. あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる (1.1、1.5)</p> <p>目標 2. 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する (2.1、2.5)</p> <p>目標 3. あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する (3.3、3.5)</p> <p>目標 4. すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する (4.5、4.7、4.a)</p> <p>目標 5. ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う (5.1、5.2、5.3、5.5)</p> <p>に直接的、間接的に寄与する活動・成果であると言える。</p>
(4) 持続発展性	<p>達成された成果 1、4 はいずれも日々の活動（センターや家庭訪問を通じたケアの提供）のなかで活用される知識や情報であることから、維持・継続については、日常的なモニタリングとフォローアップを徹底することで可能としていく。</p> <p>一方で、本来子どもケアセンターを管轄する社会開発省からの給食費や手当、運営費が支払われない事態が続いている。これについては、周辺の企業に寄付依頼等の手紙を出す、教会に寄付をお願いするなどの方法で、少しずつ別の形での支援が入りつつある。ただしこれも根本的な解決にはなっておらず、現在、菜園でつくったものの余剰を販売する方法などを協議している。また、申請団体の過去の協働団体が州都にあり、そうした団体と相談しながら、地区行政ではなくて、州など上のレベルに課題を共有し、対応をお願いするなども検討している。ただしこれについては、子どもケアセンターの毎年社会開発省への登録更新に際しての地区行政からの嫌がらせなど Mphego 子どもケアセンターへのリパーカッションが起きる可能性があり、これを予防するために慎重に進める必要がある。例年、Mphego 子どもケアセンターには、社会開発省からソーシャルワーカーのインターンが送られてきており、関係性は悪くないため、今後申請団体も関係性を築きながら、どこかの段階で話し合う機会を設けることを考えている。とはいえ、南ア行政に 100% 頼ることはリスクが大きく、上述の地道な寄付集めや菜園の維持管理の両方に取り組むことで対応していく。</p> <p>修繕されたキッチンは今後も Mphego 子どもケアセンターによって利用、活用されていく。</p>